

高校生の学校適応感と彼らの親の親役割行動の関係についての構造方程式モデルを用いた再分析

谷 井 淳 一*

抄 録

谷井・上地(1994)は、親役割診断尺度を用いて、高校生の学校適応感と両親の親役割行動の関係を検討している。本研究の目的は、構造方程式モデルを用いて上記研究で用いられたデータを再分析し、適合度指標を用いてモデルの評価を行うことにある。その結果、男子および女子の適応感に影響する変数間のパスモデルは、GFI、AGFI、CFI、RMSEAなどの指標において十分高い適合度を示した。また、受容、適応援助その他の親役割診断尺度の下位尺度が学校適応感に及ぼす影響について、外国の親子関係研究で用いられた類似の尺度で得た知見と一致する結果であることが考察された。

Key words : 親子関係, 青年期, 不適応, 構造方程式モデル

問題と目的

青年期の重要な課題に親からの自立あるいは分離の問題がある。自立の過程、すなわち分離個体化過程は青年期の発達課題として重要なものであり、この課題を成功裏に達成することは、青年期のさまざまな適応的課題に対して青年が適切に対処し、克服していくために必要であると考えられている(Hoffman, 1984; Lopez, Campbell & Watkins, 1986; Rice, Cole & Lapsley, 1990)。谷井・上地(1993)は、このような個体化の課題に対応した青年期の親子関係を実証的に研究するための質問紙尺度が少ないことを論じ、親が自己評

定する形式の親役割診断尺度(Parental Role Assessment Scale; 以下ではPRASと略記することもある)を作成した。谷井ら(1993)は、「親役割行動(略して親役割)」を「子どもの人格形成に影響を与える親の子どもに対する行動で、親の子どもに対する態度や認知的側面を含むもの」と定義し、役割という用語をあえて使う理由は、血縁的な親子関係をこえて、親が親として期待される役割を獲得することが、今後の親子関係にとって必要であり、親が自分の行動が子どもにどんな影響を与えているのかを認識する必要性が増しているという問題意識に立つからである、としている。親役割診断尺度(PRAS)は、日本の親子関係研究において比較的共通にみられる、干渉および受容の2つの下位尺度以外に、自立促進、適応援助、分離不安、自信といった第2の個体化期にある青年

* Tanii, Junichi
ルーテル学院大学准教授

期の親子関係を検討できる質問紙尺度である。

谷井・上地(1994)は、高校生の学校適応感(内藤ら, 1987)と親役割診断尺度(PRAS)の関連を検討している。この論文の中で谷井らはパス解析を用いて変数間の検討を行っているが、その後いくつかの適合度指標でモデルの適合度を検討できる構造方程式モデルの適用が普及してきた。そのため、最近の研究では適合度指標を用いてモデルの適合性を検討することが重要になっている。

本研究の目的の一つは既発表の因果モデル(谷井ら, 1994)に構造方程式モデル(SEM)を適用し、適合度を含めた検討を行うことである。また、目的の2つ目として、得られた結果に関して、主として外国の関連研究との比較を行い、親役割診断尺度の下位尺度に関する妥当性検証の一つとすることである。

谷井ら(1994)では以下の3つの仮説に基づき検討が行われている。

- (1) 親子の情緒的関係を示す「受容」と「適応援助」は適応感に好影響を与えるだろう。
- (2) 「自立促進」は親子の信頼関係と自立へむけての励ましを意味すると考えられ、これも適応感に好影響を与えるだろう。
- (3) 強すぎる「干渉」や強すぎる「分離不安」は子どもの適応感に負の影響を与える可能性がある。あるいは、この2変数については他の変数との関連で、負の影響を与えることがあるだろう。

本論文では、同様にこの3つの仮説に関して、外国の関連研究による知見を加えて考察を深めたい。

方 法

1. 調査期日および調査対象

大阪府北部の府立A高等学校の2・3年生の一部とその両親を対象とし、1992年11月に実施された。回収された調査票の内、両親・生徒のすべてが揃い、かつ回答に不備のない有効回答数は生徒数にして、男子84名(2年生22名、3年生62名、

平均年令17.4才)、女子87名(2年生24名、3年生63名、平均年令17.4才)であった。

2. 使用した尺度

(1) 親役割診断尺度

親が自己評定する形式の尺度で、干渉、受容、分離不安、自立促進、適応援助、自信の6つの下位尺度からなり、「はい」、「?(どちらでもない)」、「いいえ」の3件法で回答を求める。子どもが複数いる場合でも、特定の子どもに対する回答を求めることにした。

(2) 学校環境適応感尺度

高校生の学校適応感を測定する尺度として、本研究では内藤ら(1987)の高校生用学校環境適応感尺度(以下適応感尺度と略記する)を用いた。適応感尺度は、「学習意欲」、「友人関係」、「進路意識」、「教師関係」、「規則への態度」および「特別活動への態度」の6つの下位尺度からなり、各下位尺度毎に6つの項目、合計36の項目から構成されている。本来、この尺度は5件法として構成されたものであるが、本研究では、親役割診断尺度の評定形式に合わせて、「はい」、「いいえ」、「?(どちらでもない)」の3件法にて行なうことにした。

3. 手続き

両親用としてPRAS 2部、生徒用として適応感尺度1部をセットにして1つの封筒に入れ、1992年11月初旬、学級担任を通じて、両親(片方のみの回答も可)及び生徒自身が家庭にて回答するよう生徒に依頼し、数日後生徒を通じて同じ封筒を使用して回収した。このように、同一家族の回答用紙は同一の封筒にて回収されるような方法をとったため、匿名ではあるが、生徒および両親の3者の対応関係についてはわかるような調査となった。

結 果

1. 得点化の方法

親役割診断尺度、適応感尺度ともに、「はい」を2点、「？」を1点、「いいえ」を0点とし得点化した(ただし、一部、逆転項目については、「いいえ」を2点、「はい」を0点とした)。さらに、下位尺度毎に、項目得点の単純合計として、下位尺度得点を算出し、適応感尺度については、6つの下位尺度得点の合計点として適応感得点を算出した。なお、統計ソフトは、SPSS ver. 13.0及びAmos ver. 4.0を用いた。

2. 子どもの適応感とPRAS下位尺度との相関分析

(1) 結 果

男女生徒をこみにしたデ-タ及び男女別のデ-タを用いて、適応感得点とPRAS下位尺度とのピアソンの積率相関係数を算出した(表1)。

表1 子どもの学校適応感と両親のPRAS下位尺度との相関値

	適応感 (全体) (171名)	適応感 (男子) (84名)	適応感 (女子) (87名)
父 - 干渉	-.090	.015	-.183 +
父 - 受容	.264 **	.308 **	.176
父 - 分離不安	.001	.013	-.087 **
父 - 自立促進	.090	.043	.036
父 - 適応援助	.195 *	.296 **	.105
父 - 自信	.103	.067	.122
母 - 干渉	-.086	-.080	-.089
母 - 受容	.283 **	.294 **	.206 +
母 - 分離不安	.044	.043	-.020
母 - 自立促進	.253 **	.281 **	.142
母 - 適応援助	.220 **	.203 +	.260 *
母 - 自信	.109	.182 +	.034

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

全データを用いた分析で、適応感と有意な相関を示したのは、父親の受容($r=.264, p<.01$)、父親の適応援助($r=.195, p<.05$)、母親の受容($r=.283, p<.01$)、母親の自立促進($r=.253, p<.01$)、母親の適応援助($r=.220, p<.01$)、であった。性別でみ

た場合、男子の適応感との相関については、父親の受容($r=.308, p<.01$)、父親の適応援助($r=.296, p<.01$)、母親の受容($r=.294, p<.01$)、母親の自立促進($r=.281, p<.01$)が有意であった。女子の適応感との相関については、母親の適応援助($r=.260, p<.05$)のみが有意であった。

これらの結果を総合すると、次のようにまとめることができる。

- 受容については、女子と父親の組合せの相関がやや低い傾向が見られるが、ほぼ、すべての組合せに共通して子どもの適応感と関係がある。
- 適応援助については、男子は父親の適応援助と、女子は母親の適応援助と適応感の相関がやや高い傾向、つまり、同性の親子間の相関が高い傾向がある。
- 母親の自立促進(とくに男子との)は、適応感と有意な相関を持つが、父親の自立促進は有意ではない。
- 総合的にみた場合、女子よりも男子の適応感と親役割の相関が高い傾向が見られる。

3. 構造方程式モデルを用いての検討

次に、男子の学校適応感とPRASの下位尺度との間のパスモデルについて、SEMを用いて検討した(図1)。適合度については、 $GFI=.985$ 、 $AGFI=.938$ 、 $CFI=1.000$ 、 $RMSEA=0.000$ であり、かなり高い値を示した。父親の自立促進は男子の適応感に直接には負のパス($-.19, p<.10$)を持つが、受容へのパス($.40, p<.01$)を通じて、適応感に間接に正の影響を持つため、単純相関では自立促進と適応感の相関が有意にならないことが分かった。つまり、父親の子どもの自立への期待感は、情緒的に支持された関係の中で伝達される場合には、子どもの適応感にプラスに作用し、支持的関係のない状況で伝達される場合には、拒否的・放任的態度として子どもに受け取られる結果、適応感にマイナスの作用を持つ、という仮説が見出された。

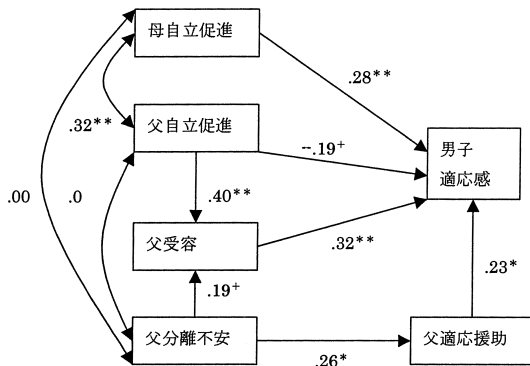


図1 男子適応感に影響する変数モデル

(注) 誤差変数は省略した

同じく女子の適応感については、母親の分離不安は直接には負のパス($-.18, p < .10$)を持つが、適応援助($.32, p < .01$)及び受容($.28, p < .01$)へのパスを通して、間接的にはプラスの作用をしている(図2)。適合度は、 $GFI=.977, AGFI=.931, CFI=1.000, RMSEA=0.000$ であり、かなり高い値を示した。つまり、分離不安は、この時期の母娘の間に通常見られる情緒的に安定した関係の中で伝達される場合には間接効果により、適応感にマイナスの作用をしないが、情緒的に不安定な関係の中では、マイナスの影響を与えている。

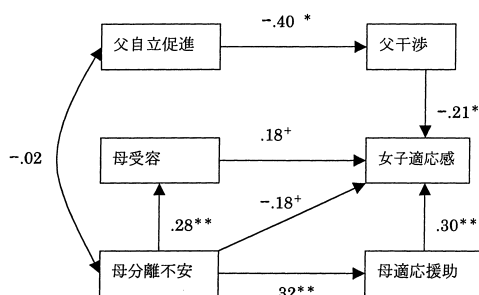


図2 女子の適応感に影響する変数モデル

(注) 誤差変数は省略した

このように、谷井ら(1994)が、親の分離不安や自立促進が子どもに与える複雑な影響を説明するために用いたパスモデルが、構造方程式モデルを用いて検討した結果、適合度が高いモデルであることが確認された。

考察とくに外国の先行研究との比較

Parker, Tupling & Brown (1979) は子どもが親の行動を評定する尺度である PBI (Parental Bonding Instrument) を作成している。PBIは、世話性 (care) と過保護 (overprotection) の2つの下位尺度からなり、Parker (1983) はPBIを用いて、神経症的抑うつ状態の患者の親の多くが、健康な人の親に比べて、世話性が低く過保護が高いことを報告している。

Pedersen (1994) は、PBIを用いて、両親の世話性 (care) が低いほど、8ヵ月後の精神的健康度 (不安、抑うつなどの傾向) や非行の問題行動 (怠学や万引きや警察の補導) に関する問題を生じやすいことを明らかにしている。「世話性」は、愛情や情緒的暖かさ、共感性、近しさを表すもので、本研究 (PRAS) の「受容」と類似した概念であり、結果も本研究と一致している。

Canetti, Bachar, Galili-Weisstub, De-Nour & Shalev (1997) は、やはりPBIを用いて適応との問題を検討している。それによると、両親の世話性が高く、統制 (control; 過保護の代わりにこの用語を用いている) が低い場合に、青年は精神病理的徴候や苦悩が少なく、幸福感に満ち、親や友人から支持されていると感じている。統制 (過保護) は、PRASの自立促進 (逆転方向) に似た概念であり、統制の低いことと自立促進が高いことが対応する。世話性が高い場合に適応状態がよいのは、Pedersenと同様であり、本研究の受容の結果と一致している。

Kenny (1987) は、愛情ある愛着の質、親の自律性の育て方、親役割としての情緒的支持の3つの下位尺度からなる子どもが親を評定する形式のPAQ (Parental Attachment Questionnaire) を作成している。Kenny & Donaldson (1991) は、このPAQを用いて、身体化、強迫、対人的過敏性、不安的過敏さ、抑うつなどの「神経症的徴候」及び、「社会的コンピテンス」との関連を検討している。神経症的徴候に関しては、PAQの3下位尺度、とりわけ「愛情ある愛着の質」が負の関連を示し

ている。愛情ある愛着の質は本研究(PRAS)の「受容」、親の自律性の育て方はPRASの「自立促進」、親役割としての情緒的支持はPRASの「適応援助」及び「受容」を併せ持ったような概念であり、この結果は本研究の結果とおおむね一致している。PAQでは、親の自律性の育て方が神経症的徴候に比較的大きな関連を有するのに対し、PRASの自立促進については少し異なる結果を得た。すなわち、母親の自立促進が男子の適応感に直接の正の効果をもつのに対し、父親の自立促進は男子の適応感に受容を通じた間接効果では正であるが、直接効果としては負の効果を持ち、単純相関は有意にならないことが明らかになっている。PAQが子どもの認知した親の行動であるのに対し、PRASの自立促進は親が評定したものであるため、親が子どもに対して自律性の援助をどのような状況で与えているかが微妙に影響していると考えられる。

Fuhrman & Holmbeck (1995) は、青年期の親子関係が肯定的(例えば、夫婦間の暖かさが大きく、親子間の葛藤が低いなど) な場合には、情緒的自律性(Steinberg & Silverberg, 1986) が低いほど青年は適応的であり、一方、家族環境が緊張度の高い場合には、情緒的自律性が高いほど、青年は適応的であることを明らかにしている。このように、自律性の働きかけや自律性の認知などの変数の青年期の子どもの適応に対する影響は複雑であり、家族に関するいくつかの変数との組み合わせで検討することが必要である。

McCurdy & Sherman (1996) は、同じく PAQ (Kenny, 1987) を用いて自尊感情と親の養育態度の関連を調べている。PAQ の 3 下位尺度のうち、父親の「愛情ある関係の質」と「親役割としての情緒的支持」は、自尊感情と正の関連を示した。また、父親の「自律性の育て方」と自尊感情の相関は、正の有意な傾向であり、他の尺度より関連が弱いことも本研究と一致している。

Adams & Jones (1983) は、子どもの認知する親の社会化スタイルとアイデンティティの関連を検討し、家族の自律性に対する励ましは、とりわけ女子のアイデンティティ達成と関連があると述

べている。また、Campbell, Adams & Dobson (1984) は、母親との中程度の愛情ある結びつきと父親からのほどよい独立性の支援が、モラトリウムやアイデンティティ達成と関連があることを示している。つまり、「家族における結合性(connectedness) もしくは近しさ(closeness) 」と「独立性と自律性の励まし」のバランスがアイデンティティ探究を促進するために重要であると述べている。

Gecas & Schwalbe (1986) は、青年期後期の親の行動が子どもの自尊感情に与える影響について、親の行動を、統制/自律性、支持、参加の三次元について、子どもの報告と親の報告の 2 つの方法で測定して検討している。女子では、子どもの報告による親の支持や参加が、子どもの自尊感情との関連が大きかった。親の報告による変数は子どもの報告による変数に比べ関連は小さかったが、親の報告による父親の支持が男子の自尊感情との関連が小さいながら確認された。Gecas et al. (1986) の「支持」および「参加」は、PRASの「適応援助」と類似した概念であり、本研究と一致した結果と考えられる。とりわけ、親の報告による「支持」が弱いながらも自尊感情との関連を示したことは注目に値する。

Holahan & Moos (1991) は、構造方程式モデルを用いて、青年の幸福度の高さと苦悩度の低さを意味する「心理的適応」に影響する変数として、「両親の支持」と「Percent Approach Coping」の 2 変数を考え、ともに心理的適応に正の影響を持っていることを明らかにしている。また、「両親の支持」の下位概念として想定した、父親の支持、母親の支持、夫婦間の葛藤はそれぞれ「両親の支持」に大きい負荷をもつが、とりわけ「父親の支持」が大きい負荷をもつことを明らかにしている。PRAS では、受容と適応援助がともに学校適応感に正の影響を持ち、母親の変数に劣らず父親の変数の影響力が大きいという結果を得ており、これらの結果も本研究と一致したものと考えてよからう。

次に、「分離不安」について検討する。分離不安

の影響に関して、本研究では構造方程式モデルを用いて、母親の分離不安が、女子の適応感に対して状況によって正負の相反する影響力を持つ複雑な変数であることを明らかにした。すなわち、分離不安は、この時期の母娘の間に通常見られる情緒的に安定した関係の中で伝達される場合には間接効果により、適応感にマイナスの作用をしないが、情緒的に不安定な関係の中では、マイナスの影響を与える、と説明している。

Lopez, Campbell & Watkins (1988) は、親子の過剰な巻き込まれ (overinvolvement)、家族の分離に対する恐れ、親子の役割逆転、親夫婦間の葛藤の4つの下位尺度からなるFSS (Family Structure Survey) を用いて大学生の適応の問題を検討している。男女の変数相関を総合すると、個人的情緒的適応とFSSの4変数がおおむね負の関連を示し、とりわけ、家族の分離に対する恐れが個人的情緒的適応と中程度の負の関連を示している。FSSの「家族の分離に対する恐れ」は、PRASの「分離不安」と類似の概念であり、ここでは青年の適応に対し負の関連を示している。

Kenny & Donaldson (1991) は、前述したPAQ (Kenny, 1987) とFSSの2つの尺度を用いて、青年の心理的機能 (神経症的徴候と社会的コンピテンス等) と愛着および家族構造の関係を検討している。結果は、身体化、強迫、対人的過敏性、不安的過敏さと、抑うつなどの「神経症的徴候」に対し、夫婦間の葛藤や「分離に対する恐れ」は正の影響を、愛着の質の高さ、親の自律性の育て方、親役割としての情緒的な支持が負の影響をしていることを明らかにした。同時に、社会的コンピテンスに対し、親役割としての情緒的支持が大きな正の影響力を、愛着の質が中程度の正の影響力をもち、分離に対する恐れなどのFSSの変数もかなりの正の影響力を持つことが明らかになった。つまり、分離に対する恐れは、子どもの神経症的徴候に対して、正の影響をもち、望ましくない側面を有するが、子どもの社会的コンピテンスに正の影響をもつなど、必ずしも悪い側面だけではないことが示唆された。このように、分離に対する怖

れは青年の適応に正負の相反する影響を状況によって持つ複雑な変数であり、PRASの分離不安が適応に与える影響に関する結果も同様の傾向を示している。

討 論

最後に、3つの仮説に関して、谷井ら(1994)と重複する点も含めて検討を行う。

仮説(1)については、「受容」及び「適応援助」が適応感に好影響を持つという仮説が支持されたといつてよからう。

先行研究においても、受容や適応援助と類似の変数が、青年の適応と正の関連をもつ報告が多くなされている。しかし、その多くは、子どもが親の行動を評定する形式の変数である (三隅ら, 1971; 松山, 1979; Pedersen, 1994; Kenny et al., 1991; Holahan et al., 1991)。PRASの下位尺度の各変数は親が評定する変数であり、子どもの評定による学校適応感という方法上独立した変数との間にある程度の関連が示されたことは、注目すべき結果と言える。

子どもの認知によって親の態度・行動を測定する研究が多い背景には、親子関係研究において、子どもの性格や行動に影響を与える変数として子どもの親認知が最も直接的なものと考えられているからである。また、現実的な問題として子どもから調査データを得るのは比較的容易であるが、親からデータを得るのは相対的に難しいという事情もあると考えられる。

小嶋(1963)は、“客観的事実のいかにかわらず、子どもにとっては、自分の認知している親の姿が現実”なのである、と述べる一方、“(1)人間の行動は意識としてとらえられない要因にも規定されう。(2)人間の知覚内容と、その人間による知覚内容の報告が一致しているという保証はない”として、この方法の問題点を指摘している。古川(1972)は、親及び子ども用のPM式親子関係尺度を用いて、親の自己認知と子どもの親認知との間に認知的不一致があることを見いだしてい

る。すなわち、親に対してポジティブな態度が見られる子どもの親に関して、子どもの認知では、PM型・M型であるが、親の認知ではPM型・P型であるとしている。ところが、親の認知のPM型・P型が、特に、子どもにPM型・M型に認知されるという傾向は認められないことから、親の態度・行動の子どもに与える影響は、子どもの認知のみを媒介としているとは説明できないだろうと述べている。この結果は、親の子どもに対する態度・行動が、小嶋のいう子どもの“意識としてとらえられない”経路を通して子どもに影響を与えていることを示唆するものである。

Gecas et al. (1986)は、親の行動を、統制/自律性、支持、参加の三次元について子どもの報告と親の報告の2つの方法で測定し、子どもの自尊感情との関連を報告している。結果は、子どもの報告による親の行動では、親（特に父親）の統制/自律性と男子の自尊感情の関連が見られた。親の報告による親の行動では、父親の支持と男子の自尊感情との関連が小さいながら確認された。親の変数の影響は子どもの変数の影響に比べて小さいとはいえ、子どもの変数では関連のなかった「支持」が、親の変数では、子どもの自尊感情と関連があったことは、子どもの“意識としてとらえられない経路”の存在を示唆している。

すなわち、PRASで測定された親役割行動、特に、「受容」及び「適応援助」が、先行研究における子どもの評定による親の態度・行動のうち、「情緒的支持」、「M機能」等の親子の情緒的関係を表す因子と同程度の影響を子どもの学校適応感に与えていることは、子どもに意識されない親の影響力が比較的大きいことを意味していると思われる。

仮説(2)については、「自立促進」は適応感に好影響を与える場合もあるが、親子の情緒的関係を欠いた状況のもとで伝達された場合には、負の影響をもたらす可能性についても示唆された。

Fuhrman et al. (1995)は、青年期の親子関係が肯定的（例えば、夫婦間の暖かさが大きく、親子間の葛藤が低いなど）な場合には、情緒的自律性（Steinberg et al., 1986）が低いほど青年は適

応的であり、一方、家族環境が緊張度の高い場合には、情緒的自律性が高いほど、青年は適応的であることを明らかにしている。自律性の働きかけや自律性の認知の適応に対する影響は複雑であり、家族に関する他の変数との組み合わせで子どもに対する影響が変化することは大いにありうると言える。

Adams et al. (1983)は、アイデンティティ拡散の女子は、母親が自律性を励ます一方で、母親による統制と規制が大きいと感じていると報告している。この種の母親は、青年が自律的であるようにと望んでいるように見えるが、他方で、子どもが自律性を達成するまでの過程を統制しようとするのである。こういった状況は二重拘束の意味を持つため、女子青年がアイデンティティ達成に向けてもがき苦しむことになり、拡散状況に陥ると考えられる。

谷井(1994, p.47の表6, 表7)が示すように、PRASの自立促進と適応援助は無相関である。つまり、子どもに自律的であれとする姿勢と子どもに対する支援行動は、独立しており、むしろ並存可能である。自律性を伸ばそうという基本姿勢に加えて、適時性のある援助姿勢を取れることが、子どもにとって適応的な親役割なのだと考えられる。しかし、Adams et al. (1983)の報告のように、そのような姿勢が行き過ぎた行動となりその行動が子どもに統制的に受け取られる場合には、負の働きをされると考えられる。

仮説(3)については、「干渉」は、やや負の影響を与える場合もあるが、高校生ではそれ程大きな影響力を持たないという結果を得た。「分離不安」については、「自立促進」と同様、親子の情緒的関係を欠いた状況で伝達された場合は、負の影響をもつ可能性が示唆された。

分離不安については、Kenny et al. (1991)の研究で、FSSの下位尺度の「分離に対する怖れ」が、神経症的徴候に正の影響をもち、好ましくない影響を持つ一方、社会的コンピテンスに正の影響をもつなど、必ずしも悪い側面だけではないことに触れ、分離不安と類似のこの変数が、青年の適応

に正負の相反する影響を状況によって持つ複雑な変数である点を論じた。分離不安については、他の変数との組み合わせや時期の影響により違う働きをする可能性があると考えられる。

このように、PRASの下位尺度のうち、まず、「受容」と「適応援助」が子どもの学校適応感と関連があることについて考察した。また、「自立促進」と「分離不安」については他の変数との組み合わせの問題も含めた複雑な働きをする可能性について議論した。そして、これら変数の適応感との関連の意味を考察する中で、親から子の方向への因果の可能性について言及した。しかし、実際に両者の因果関係を立証するためには、さらに、研究を積み重ねる必要がある。PRASの下位尺度と、子どもの評定による親の態度・行動(例えば、EICAなどで測定されたもの)との関係、子どもの人格変数との関係などの変数との関係を検討する必要がある。また、その際、親役割行動が子どもの親認知、子どもの人格変数などの媒介変数やまたはそれ以外の経路を通して、如何に、学校適応感に影響を与えているかをさらに詳しく検討する必要がある。これらのことが依然として課題として残っている。

自立促進と分離不安に関しては、谷井ら(1994)のパスモデルについて、構造方程式モデルを用いて、適合度が十分高いことが明らかになった。

いくつかの課題が残されているとはいえ、親役割診断尺度を用いた本研究の結果は、多くの先行研究の類似の尺度を用いた結果と一致していた。このことは、本研究の尺度の妥当性を保証する有力な根拠となると考えてよからう。

引用文献

- Adams, G. R., & Jones, R. M. (1983). Female Adolescents' Identity Development: Age Comparisons and Perceived Child-Rearing Experience. *Developmental Psychology*, 19, 249-256.
- Campbell, E., Adams, G. R., & Dobson, W. R. (1984). Familial Correlates of Identity Formation in Late Adolescence: A Study of the Predictive Utility of Connectedness and Individuality in Family Relations. *Journal of Youth and Adolescence*, 13, 509-525.
- Canetti, L., Bachar, E., Galili-Weisstube, De-Nour, A. K., & Shalev, A. Y. (1997). Parental Bonding and Mental Health in Adolescence. *Adolescence*, 32, 381-394.
- Fuhrman, T., & Holmbeck, G. N. (1995). A Contextual-Moderator Analysis of Emotional Autonomy and Adjustment in Adolescence. *Child Development*, 66, 793-811.
- Gecas, V., & Schwalbe, M. L. (1986). Parental Behavior and Adolescent Self-esteem. *Journal of Marriage and the Family*, 48, 37-46.
- Hoffman, J. A. (1984). Psychological Separation of Late Adolescents From Their Parents. *Journal of Counseling Psychology*, 31, 170-178.
- Holahan, C. J., & Moos, R. H. (1991). Life Stressors, Personal and Social Resources, and Depression: A 4-Year Structural Model. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 31-38.
- Kenny, M. E. (1987). The Extent and Function of Parental Attachment Among First-Year College Students. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 17-29.
- Kenny, M. E., & Donaldson, G. A. (1991). Contributions of Parental Attachment and Family Structure to the Social and Psychological Functioning of First-Year College Students. *Journal of Counseling Psychology*, 38, 479-486.
- 小嶋秀夫(1963).「親子関係の心理学的分析」『京都大学教育学部紀要』, 9, 125-144.
- Lopez, F. G., Campbell, V. L., & Watkins, C. E. Jr. (1986). Depression, Psychological Separation and College Adjustment: An Investigation of Sex Differences. *Journal of Counseling Psychology*, 33, 52-56.
- 松山安雄(1979).「学級におけるスクール・モラルに関する研究(第3報) スクール・モラルと達成動機及び親の指導性との関係」『大阪教育大学紀要(第・部門)』, 28, 19-28.
- McCurdy, S. J., & Scherman, A. (1996). Effects of Family Structure on the Adolescent Separation-Individuation Process. *Adolescence*, 31, 307-319.
- 三隅二不二・阿久根求(1971).「両親の指導性が児童の学業成績、テスト不安と適応性に及ぼす効果」『教育・社会心理学研究』, 10, 157-168.
- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三(1987).「高校生用学校環境適応感尺度作成の試み」『兵庫教育大学研究紀要』, 7, 35-146.

- Parker, G. (1983). Parental 'Affectionless Control' as an Antecedent to Adult Depression. *Archives of General Psychiatry*, 40, 956-960.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10.
- Pedersen, W. (1994). Parental Relations, Mental Health, and Delinquency in Adolescents. *Adolescence*, 29, 975-990.
- Rice, K. G., Cole, D. A., & Lapsley, D. K. (1990). Separation-Individuation, Family Cohesion, and Adjustment to College: Measurement Validation and Test of a Theoretical Model. *Journal of Counseling Psychology*, 37, 195-202.
- Steinberg, L., & Silverberg, S. B. (1986). The Vicissitudes of Autonomy in Early Adolescence. *Child Development*, 57, 841-851.
- 谷井淳一 (1994). 『親役割診断尺度(中・高校生親用)作成の試行的研究』平成5年度兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士課程学位論文
- 谷井淳一・上地安昭 (1993). 「中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み」『カウンセリング研究』, 26, 113-122.
- 谷井淳一・上地安昭 (1994). 「高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係」『教育心理学研究』, 42, 185-192.

Re-analysis using the Structural Equation Modeling about the Relationship between School Adjustment of High School Students and Parental Role Behavior of Their Parents

Tanii, Junichi

Tanii & Uechi (1994) investigated the relationship between school adjustment of high school students and parental role behavior of their parents measured by Parental Role Assessment Scale (PRAS). The purpose of the present paper was to re-analyze these data using the Structural Equation Modeling and to evaluate the path-model using the Fit Index. The fit index (such as GFI, AGFI, CFI, RMSEA) of the path-model between variables that affected the adjustment of male or female high school students was sufficiently high.

The effects of Acceptance, Assistance of Adjustment, and other subscales of PRAS on school adjustment were consistent with the findings by some of foreign researches about parent-child relationship.

Key words: parent-child relationship, adolescence, mal-adjustment, structural equation modeling

